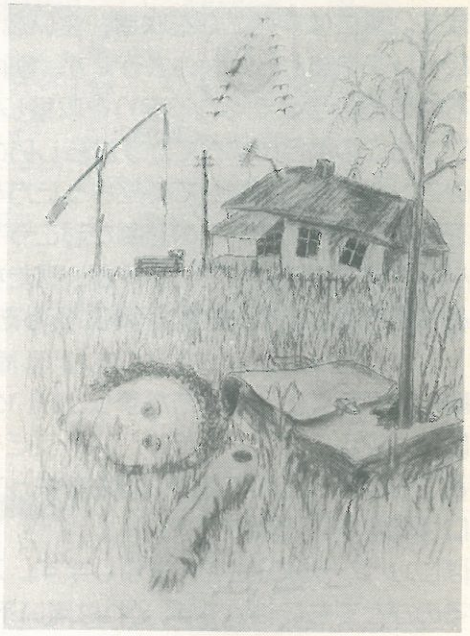
NO.81.2004.5.31.

「子どもの目で見たチェルノブイリ」展 開催される！

4月22日、ジトーミル市で、州内の児童画コンクール「子どもの目で見たチェルノブイリ」参加作品の展覧会開会式が行われ、私はそれに招待されて出席しました。

展覧会は州立学術図書館のホールで行われており、100点ほど寄せられたという作品中の50点ほどが額に入れられ壁に展示されていました。同じホールでの開会式に集まったのは、主催者(「チェルノブイリの人質たち」基金、絵画教室「アート・セロー」)・来賓・マスコミ関係者の他、コンクール参加者とその父兄、合わせておよそ50人くらいでしょうか？3つの年齢別カテゴリーそれぞれの1等賞～3等賞の他に、特別賞が設けられており、来賓である3団体(「チェルノブイリの消防士たち」基金・チェルノブイリ障害者支援基金・「リクヴィダートル」基金)の代表が、それぞれの団体の賞を各1名に出しました。スポンサーである画材店と州の民放ラジオ局も、それぞれの特別賞を出しました。画材店の特別賞の一つは、コンクールに出品していた静岡サレジオ小学校の男の子の作品が受賞しました。「チェルノブイリ救援・中部」賞も用意されており、私の好きな絵を選ぶように言われたので、8歳の女の子の作品にしました。



"ゾーンの新しい春"
アリーサ・ドゥボーヴィク(16才)

（ウクライナ駐在員：竹内高明）

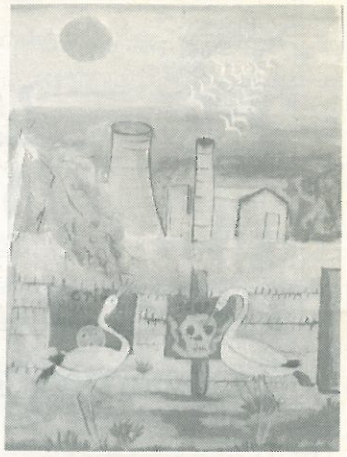
〒466－0822　名古屋市昭和区楽園町137　1－10
チェルノブイリ救援・中部　代表：田中良明
郵便振替：00880－7－108610
TEL/FAX：052－836－1073（月・水・金　10:00～17:00）
E－mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp
ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

…「子どもの目で見たチェルノブイリ」展に出品した少女からの手紙を紹介します。

こんにちは！

この手紙を書いているのは、リーリヤ・サヴィヴナ・ヴァスィリエンコです。

私は12歳です。1991年11月7日ヴヤゾヴェツ村[ジトーミルの北西30数kmの距離にある村]に生まれ、今もそこに住んでいます。私の村は絵のように美しいところです。冬にはウソ[すずめ科の鳥]が飛んでいます。ウソは、ウクライナのシンボルであるカリーナ[スイカズラ科の灌木]の実が好きです。春、ヴヤゾヴェツ村では、労働の季節が始まり、人々は果樹を植えたり、野菜の種をまいたりします。小川がさらさらと流れ、春の最初の使者である鳥たちが飛んできます。夏にはすべてが花咲き、生い茂り、まるで村が彩りあざやかなドレスをまとったかのようです。秋には最も大事な時期が訪れ、私たちは自然の与えてくれる実りを収穫します。ウクライナの大地では、いつもこのようにすべてがすばらしいのです。



"彼等が戻ってきた"
レヴーク・コーリャ(11才)

このコンクールを主催してくださった方々に、チェルノブイリ原発のことを忘れないでいてくれることを感謝したいです。この悲劇が起こってしまったのは、本当にくやしいことです。私は、スコロビウ小中一貫学校に通っていますが、私たちの学校にも、チェルノブイリのせいで病気にかかっている子どもたちがいます。彼らは病院に行ったり、保養と治療のためにサナトリウムに行ったりします。サナトリウムでは、病人は大事にされていますが、私たちと私たちの国にとっては、あらゆる恐ろしい悲劇と関係なく暮らせる方がずっといいのではないかと思います。

私には、マルィナ・チチルコという友だちがいます。彼女は、チェルノブイリの被災者で、以前は目がとてもよかったのですが、視力を失ってしまいました。今、治療を受けなければなりませんが、それにはお金が必要なのです。

私は[コンクールに]絵をお送りします。入賞したいです。私は、「*チェルノブイリ*」という言葉を口にするのがとてもこわいです。それは黒い不吉な言葉、私たちみんなの上にたちこめる黒い雲です。「*チェルノブイリ*」――それは恐怖の言葉、戦争です。

私の夢は、「人間が地球の上で永遠に、そして平和に暮らすこと」です。それから、今、これを書きながら、私は、愛の手がかなえてくれたらいいなと思う、もう一つの夢のことを考えています。それは、「ギターを手に入れること」です。私には、ギターが弾ける友だちがいます。ですから、もし私が自分のギターを手に入れられれば、彼が弾き方を教えてくれるでしょう。でも今は、ギターを買うことはできません。私の家族は家を建てていて、お金は全部それに消えてしまうからです。

"チェルノブイリの雨"
ログヴィンチュク・オクサナ(14才)

4月7日には、オチェレチャンカ村に行って、サッカーの試合をしました。少し前、3月25日には、私は私のチーム[…原語агітбригада。ステージで詩を朗読したり、歌を歌ったりするチーム…]とチェルヴォノアルメイスク町の「児童創造館」[のコンクール]に行って、3等賞をもらい、学校に新しい表彰状を持って帰りました。

私のふたつの夢がかないますように…。

敬意と愛をこめて。さようなら

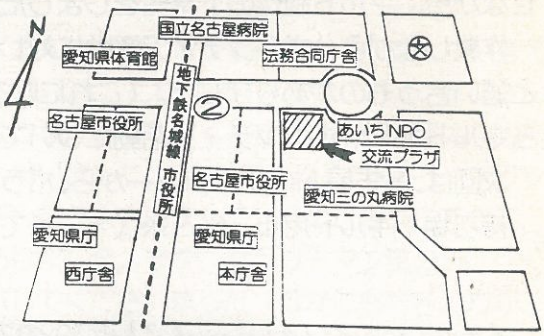
＊[　]内は竹内の補足。原文はウクライナ語。

「チェル救デー」開催のご案内

今年もチェルノブイリ救援・中部は、「チェル救デー」を開催いたします。チェル救の活動をもっと深く知る絶好の機会です。参加費は無料、正会員以外の方も大歓迎、ぜひお越しください。

日　時 ◆ ２００４年　６月１２日（土）
午後１時３０分～４時３０分

場　所 ◆ あいちＮＰＯ交流プラザ　Ｂ室　TEL　052-961-8100
（地下鉄名城線「市役所」駅下車　②番出口より徒歩４分）



プログラム

第１部　◆ **総会**
2003 年度の事業および決算報告
2004 年度の事業計画および予算について

第２部　◆ **２月訪問団の**
現地報告
メンテナンス事業報告
◆ **茶話会**

今年２月、ジトーミルに訪問した小牧崇さんと石川博仁さんに、現地で見なければ分からない「救援･中部」の今までの支援の成果や問題点を語っていただきます。
メンテナンス事業報告は、４年にわたり、中古医療機器のメンテナンスおよび技術指導に携わる北野達也さんの最新報告です。どうぞお楽しみに。

―同時開催―

「チェルノブイリの子ども達の絵画コンクール」展の作品展示

（p1～p2 を参照してください）

今年４月、ウクライナ・ジトーミル州で行われた展覧会の作品の一部をとりよせ、展示します。日本初公開となるこれらの作品は、終わりのない放射能被曝に苦しみながらも耐え、必死に生きている子ども達の心の叫びです。ぜひご鑑賞ください。

ウクライナ講座へのおさそい

6／19（土）13:30～16:00

「チェルノブイリ救援　ボランティア・セミナー」（於：中小企業センター）

4月のウクライナ講座は、残念ながら参加者が少なく、寂しくもありましたが、しかし、少人数精鋭（!?）で、ウクライナのチェルノブイリ被災者の苦しみに思いを馳せながら、キルト制作の下準備をしました。

作業しながら、ボランティア活動に対しての体験や思いなどを語り合い、しみじみと通い合うものがありました。（これに味を占めて!）次回もティータイムを持ちながらキルト制作やボランティア活動について話し合います。

次回は、名古屋NGOセンターから、ボランティア研修中の若者たちも参加します。

持ち物：キルト用布・針・糸（＊無くても結構です）。**参加費**：300円

チェルノブイリへ“一人ひとりの花”をキルトにして贈りましょう！

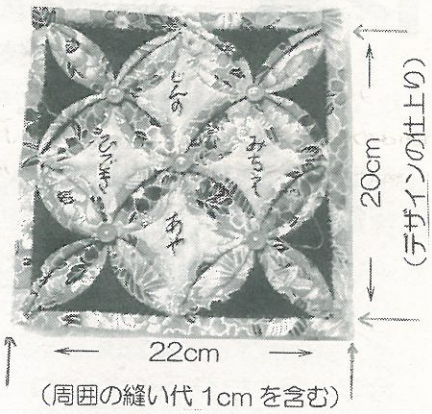
4月26日は、チェルノブイリ事故18周年のメモリアル・デーでした。

18年という時間は、事故を風化させ、被災者はいくつもの放射能被害を抱えて、置き去りにされています。『チェルノブイリ救援・ウクライナ講座』では、今年の活動の一環として、被災者を励ますキルトを制作します。私たちが支援を続けている、移住者村の「診療所」と、事故処理作業者や子ども達が利用している、病気療養・静養のための「サナトリウム」へ、日本の市民の心をキルトに込めて贈ります。

キルトのテーマは“花”。一人ひとりが「自分の好きな花」のデザインでピースを作り、最後に縫い合わせて、サナトリウムのタペストリーに、また診療所のベッドカバーにする予定です。

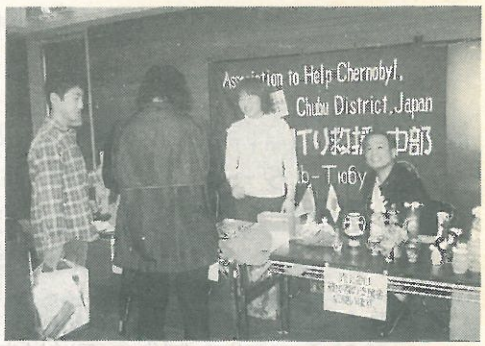
裁縫が、上手でなくてもかまいません。自分だけの花に心を込めて、ウクライナの病気の人びとへ贈ってみませんか？

作り方：22ｃｍ四方の布（周囲１ｃｍずつの縫いしろを含む）、
布地は、ハギレなど自由（厚い生地は避ける）
「花」をデザインする
（刺繍・アップリケ・貼り付けなど工夫して）



＜ウクライナ講座８月の予定：チャリティ・バザールの参加者も募集中です！＞

連合メーデーのバザーに参加しました（^.^）！（浅野未歩）



<右から二人目が、浅野さん>

去る、４月29日、名古屋市の「レインボーホール」で、連合メーデーのイベントが行なわれました。その一角、「NPOコーナー」で、私たちチェルノブイリ救援・中部もバザーを出展しました。

私の担当は、主に「ウクライナの民芸品の販売」と「ウクライナ講座のチラシ（キルト作り）配り」でした。

とてもたくさんの来場者があり、これならたくさんの売り上げが期待できるかなと甘い考えをもちました。しかし、実際に民芸品の販売を始めてみると、これがなかなかたいへん。みなさん、民芸品を手にとって見ていただけるのですが、なかなか買ってはくれません。何の団体なのか分からず、遠巻きに見ている人もたくさんいらっしゃいました。（白い目で見る方も…）。チラシを受け取っても、目を通さずにその場で折り曲げてしまう人もいました。そのときはさすがに、少し落ち込みました。でも、嬉しい事もたくさんありました。まず、サラリーマン風の50代ぐらいの男性が、灰皿を買った折り、お釣りをカンパしてくださいました（ほかにも数名の方が、募金箱にカンパしてくださいました）。また、数名の方が「キルト作りの運動に参加するよ」と、約束してくださいました。　午後３時まで（約６時間）の活動で、18,060円の売上金とカンパが集まりました。その金額を見て、私は驚きました。それは、昨年の夏に、ボランティア仲間である岩田さんと二人で、募金活動をしたときの金額「約500円！」と比較してしまったからです。そして、驚いたと同時に、大きな手ごたえを感じました。今後も、このようなチェル救の活動があれば、また参加したいと思います。今回の活動は、とても大変でしたが、同時に、自分にとって何か大切な物を得ることができたような気がします。最後に、今回一緒に活動させていただいた神野さんご夫妻に感謝いたします。貴重な経験をさせていただいて、ありがとうございました。

チェルノブイリ原発事故18周年
『被災者救援チャリティー公演会in東濃』に参加して　（石川博仁）

多治見市文化会館で、去る５月１日に催されたこの公演会では、講談師神田香織さんの熱のこもった講談や、事故処理作業者であるミハイル・グジーさんの体験談、その娘さんたち（ナターシャ＆カーチャ）のウクライナ民謡などの内容が披露され、ホールを埋めた来場者はみな、その迫力ときれいな歌声を堪能しました。

神田さんの講談は、被災した人々の事故当時の様子や気持ちを、臨場感たっぷりのボリュームで表現するもので、見ている私たちは、まるで自分もその雰囲気に飲み込まれてしまうような感覚を覚えたと思います。

またグジー親子の出演によって、日本にいながらにして、現地の人々の生の声や姿を確かめることができ、歌声とともに彼ら彼女らの悲しみや希望が、遠くかなたから一気にこちらへと、近づいてきたかの如く感じられました。

被災者の人たちは、今後ももちろん被曝の後遺症と闘わねばならず、またご家族の負担や将来の不安もいかばかりかと推測されます。できることならば、もうこのような惨事を二度と繰り返さないように、世界が美しく穏やかな場所であり続けるように、願って止みません。

障害者協会への支援 再開へ

（田中良明）

「ポレーシェ」78号でお伝えしましたが、私たちの支援していた「チェルノブイリ障害者協会」が昨年春に分裂し、それまで代表をしていたタビノヴァさんたちの作った「リクヴィダートル」と、新しい執行部になった「障害者協会」の、2つの団体が存在するようになりました。私たちは、現地訪問団が事情調査をするなどして対応策を検討した結果、昨年11月の運営委員会で次のような決定を行いました。

1．「リクヴィダートル」は、チェル救の支援金に頼るだけではなく、自主的な活動にも取り組んでおり、支援対象として問題はない。
2．「障害者協会」は、（チェル救が疑念を示して変更を求めた後の）支援金の使い方はきちんとしていたが、一部の不穏当な行動についての自己批判や謝罪はなく、自主的活動も低調であることが分かった。チェル救の支援対象になるためには、これらの問題が解決・克服されなければならず、さらに観察を続ける。

今年度になり、改めて議論した結果、「リクヴィダートル」については、引き続き支援を行うことが確認され、「障害者協会」については、支援を再開するか否かを決める判断材料にするため、以下の質問をすることにしました。

1．　昨年3、4月に「障害者協会」は、その時点で未使用であった02年度支援費を一律現金配分しようとしました。この件の経緯および「障害者協会」の意見をお聞かせください。
2．　昨年秋、「障害者協会」の一部の人びとが、「ホステージ基金」へ押しかけ、威圧的な言動をしたと聞いています。また、正体不明の個人あるいはグループによって、「ホステージ基金」および「リクヴィダートル」に対するデマの撒布や、KGB・税務当局等への告発などが行われたと聞いています。この件についての「障害者協会」の意見をお聞かせください。

これに対する回答の中で、「障害者協会」は、一部の会員の行為を不適切であったと認め、また、「リクヴィダートル」と敵対しないことを表明しました。私たちは、このような態度を評価し、「障害者協会」に対する支援を再開することにしました。

支援の最終的な対象は、個々の被災者です。私たちは、この人たちのことをいちばん大切に考えています。同時に、彼らを統括している団体に問題があったら、私たちが意図している支援にはなりません。今回の決定においても、この矛盾に悩まされました。問題が完全に解決されたわけではありませんが、個々の被災者のことを考えると、これ以外の選択肢はありませんでした。

さしあたり、半年間分として両団体に対して20万円ずつの支援を行いますが、支援のあり方については、これからも両団体と理解を深め合っていかなければなりません。そのためには、「ホステージ基金」にも大いに努力してもらう必要があります。

「チェルノブイリ救援・中部」の皆さまへ

チェルノブイリ２級障害者
タマーラ・リュードヴィキヴナ・チェルヌィシェヴァ　より
住所：ジトーミル市ヴァウキウスクィイ通り９番地 220 号室

1970 年生まれの息子のために、車椅子を贈っていただき、ありがとうございます。困難な時に支援してくださったこと、いただいた車椅子で、息子が今おもてに出、太陽を見、外気を吸うことができるようになったことに、感謝申し上げます。

息子に支援してくださった方々に、神がご健康を恵まれますようお祈りいたします。

私の家族について、少し書かせていただきたいと思います。我が家は４人家族で、みな「チェルノブイリ障害者」です。夫は、チェルノブイリ原発事故の事故処理作業者で、一家はコロステン地区の汚染地域から、ジトーミル市に移住しました。

私は手術を受けた後、２級障害者になりました。夫は高血圧症で、いつも血圧が高いのです。やはり２級障害者です。

上の息子は 1970 年生まれで、重い病気のため車椅子に乗っています。1 級障害者です。下の息子は 1989 年生まれで、ホルモン剤を常用しており、重病のため髪の毛が生えず、禿げています。在宅して勉強しています。

チェルノブイリ原発事故のために、一家を不幸が襲いました。みな障害者になってしまい、常に治療が必要ですが、お金が足りません。誰も働いていないので、年金で生活しています。その他に収入はなく、やっとのことで生きながらえています。

善良な皆さん、皆さんのような方々がこの世にいて、私たちの不幸に応えてくださることに対して、神のご加護がありますように。

さらに、もしできればお願いしたいのですが、どなたか中古のコンピューターの入手に、ご協力いただけないでしょうか。と申しますのは、上の息子は障害者リハビリセンターでコンピューターのコースを終了しており、下の子は９年生で、自宅で勉強しているからです。家にこもってすることがないというのは、大変つらいことなのです。
何かぶしつけなことを書きましたようでしたら、どうかお許しください。

どうぞお元気で。一家より、敬意を込めて
2004 年４月 25 日

1970 年まれの息子ヴァレーリイの写真を同封します。

「NGOのプロジェクト評価」研修に参加しました。

（戸村　京子）

NPO法人名古屋NGOセンターとNPO法人アーユスの主催で、「NGOプロジェクト評価（事業評価）」の研修が、5月14、15日に行なわれました。「プロジェクト評価」はあまり聞きなれない言葉だと思いますので、Q&A形式でご紹介しましょう。

Q：「プロジェクト評価」ってなに？

ー「プロジェクト評価」とは、NGOが行なう国際協力のプロジェクト（事業）が実施されて変化があったかを把握し、ある価値判断のもと、次の段階で活用されるための情報を提供（フィードバック）するものです。

Q：「どのように」評価するの？

ーその方法として、今実施している（終了した、あるいはこれから実施する予定の）プロジェクトは、何か問題を持っていないか？　現地に有効な効果をもたらしたか？などの調査項目を整理し、アンケートやインタビューなどで調査します。

Q：「何のために」評価するの？

ー調査結果を評価して、プロジェクトの問題点を改善したり、継続するかどうかを検討する、次のプロジェクトをより良くする、また資金提供者への説明などへの情報提供に生かされます。

Q：「研修」って難しい？

ー『国際協力プロジェクト評価』（国際ジャーナル社）をテキストに、著者の一人源由理子さんを講師として、名古屋NGOセンターに加盟登録している団体の内6つのNGO（ハイチの会·I-CAN·AHIなど）から参加者が集まり、講義を受け意見交換しました。

Q：「メンテナンス事業」がモデル？

ー今回は、私たち「チェルノブイリ救援・中部」が実施しているプロジェクト、「ウクライナでの医療機器のメンテナンス事業と技術移転」と「ジトーミル工科大学技術者養成コース設置計画」をモデルにして学習しました。他のNGOでも、国際協力のいろいろなプロジェクトに取り組み努力しているわけですが、それぞれのプロジェクトの目的・方法・問題等は多様です。

Q：「研修会」の評価は？

ーチェル救が約5年間取り組んできたメンテナンス事業について、中間評価という形で、参加者の外部の視点からも、活動を整理することができたと思います。

Q：「評価の結果」は？

ー研修ではもちろん実際の調査活動を行なっていないので、学んだ手法を用いて実際に評価を行なうかどうか、現地調査などには費用も時間もエネルギーもかかることなので、今後、チェル救内部での議論となります。

Q：「評価は必要」なの？

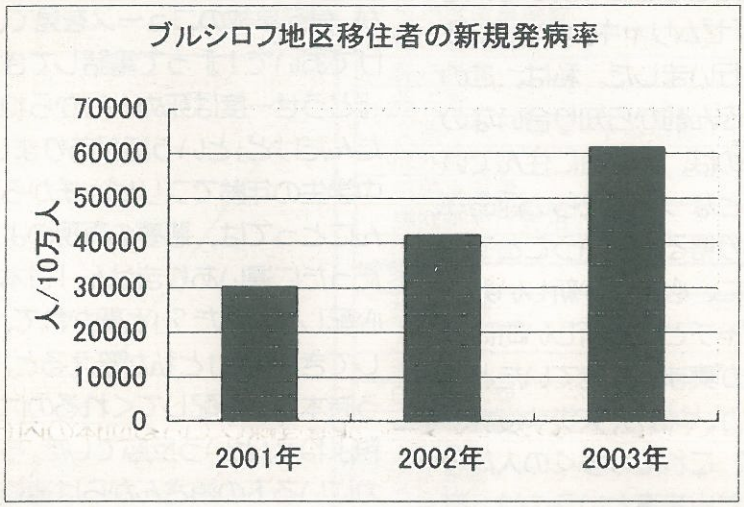
ー私たちが15年にわたるチェルノブイリ被災者の救援活動に努力してきたつもりでも、取り組んできたプロジェクトがどのくらいの効果があったか、もっと有効な方法は無いか、現地とのコミュニケーションなど、悩みや問題は付きまといます。寄付金や政府補助金など活動資金が減少する中で、効果的な活動を続けていくためには、今後ますます「プロジェクト評価」が大切な課題となっていくでしょう。

連載40

移住者たちのその後

チェルノブイリの事故後、原発の街プリピアチはもちろん、ナロジチなど周辺の多くの村々から、人々が非汚染地域に移住した。半径30Km圏内の人々は強制的に、それ以外の人々は政府の勧告に従って、故郷を捨てた。しかし、人々が移住したのは早くても事故から3日後、多くは1週間から数ヶ月以上も後になってからだった。

その人々は、事故直後の強烈な放射能を浴びており、移住してからの健康が懸念されていた。今、その懸念は現実となっている。



（ブルシロフ地区病院調べ：2004年5月）

上のグラフは、私たちが最近ブルシロフ地区病院に依頼した調査結果に基づき作成したものである。

ブルシロフ地区は、18,000人あまりの人々が住む町だが、現在、その31%（5,652名）が汚染地域からの移住者という。内訳は、事故処理作業者が153名、強制疎開者が38名、任意移住者が4,428名、これらの被災者の子どもが1,033名である。非汚染地域だったブルシロフ地区は、こうした被災者が大量に移住してきて、地区病院には患者があふれるようになり、地区全体の罹病率も上昇している。当グラフは、「移住者が年間新たに発病した数」を表す。これを見れば、2001年は10万人当たり3万人、つまり移住者家族の3人に1人が発病したことが分かる。その数は、さらに増加し続けており、昨年度は6割を超える移住者が、何らかの病気を新たに発症した。ガン発生率はこの3年で2倍に、血液循環系疾患は6倍に跳ね上がったという。高齢化の影響もあるかも知れないが、約5名に1人が子どもであることを考えれば、この数字はあきらかに異常である。

事故時に被曝した人々は、移住してもなお放射能の影響から逃れられないのである。私たちは、ブルシロフ地区病院に毎年医薬品を提供しているが、近年の寄付金減少のため、患者数増加とは逆に、その額を年々減らさざるを得ない。ブルシロフ病院は今、ロシア革命前の古い病院を建て直し、再出発しようとしている。

まだまだ、私たちの支援は必要である。

（河田）

竹内さんのウクライナ便り

４月末から５月初め、恒例の「ジュノーの会」派遣団による、チェルノブイリ被災者甲状腺検診が、チェルニゴフ州の汚染地区とキエフで行われ、私は通訳として参加させていただきました。キエフでの検診は、以前本欄でも紹介した、プリピャチからの疎開者の団体「ゼムリャキ（同郷人）」の集会室で行われ、検診団が帰国した後にもしばらく残っていた専従の柳田さんは、「ゼムリャキ」メンバー数名にインタヴューを行いました。私は、この団体の人たちとずいぶん前から知り合いなのですが、いつも思うのは、同じ町に住んでいて同じ事故の被害者となった人たちの運命が、いかにさまざまであり得るかということで、新しく話を聞くごとに、必ず何か新しい発見があります。プリピャチという新しい町に、旧ソ連の各地から人が集まってきていたという事情もあるのですが、やはり、天災や疫病、戦争や革命を除けば、これだけ多くの人たちの人生を一挙に変えた出来事というのは、歴史の中でもまれなのではないかと思います。新しい町並みを美しい自然が取り囲むプリピャチで過ごした、事故前の若く元気だった日々を追憶して泣いてしまう人もあり、しかし、病気を抱え家計のやりくりに苦労している彼らが、この団体に集まり、助け合っている努力を支えているのは、その若い日につちかわれた、人間性（のよい部分）を信じる心ではないか、というのが私の印象です。

その仕事をしていた５月６日に、ノヴォボグダノフカ村の軍の弾薬庫の爆発が起こり、私はTVニュースでそれをちらと見ただけだったのですが、10日（9日の独ソ戦戦勝記念日の代休）に町なかに出た際、偶然会った知人に、爆発や火災がまだ完全には収まっていないこと、同村がザポロージェ原発から40kmほどのところにあり、延焼が危惧されていることを聞きました。後日、知人の元チ

<「ジュノーの会」派遣団に同行して、お仕事中の竹内さん>

エルノブイリ原発職員の女性から電話があり、雑談の途中、「キプロスに住んでるうちの長女が、爆発事故のニュースを見て、『こっちに逃げておいで！』って電話してきたの。私は、『どうせ一度は死ぬんだからねえ』って答えたんだけど」という話がありました。小学生か中学生の年齢でプリピャチから疎開した娘さんにとっては、悪夢の再現のようなニュースだったに違いありません。「日本の人はだれか心配してくれた？」と聞かれて、「母親が電話してきただけ」と私が答えると、「いざっていう時本気で心配してくれるのは、やっぱり母親よねえ」という反応でした。ちなみにアメリカにいる下の娘さんからは連絡がなかったそうで、アメリカでは自分とこのテロの心配でそれどころじゃないんだろう、と私と彼女の意見が一致しました。爆発事故の原因については、初期の段階で、「軍職員のタバコの不始末」という最高検察庁長官の発表がありましたが、その後、ウクライナ国内で180数ヶ所に存在している同様の弾薬庫の危険な状態（軍の予算不足のため、必要な安全措置が取られていない）が報道され、老朽化した弾薬の処理を請け負っていた業者が、不正の跡をくらますため爆発を仕組んだのでは…という国防省の見方、いや、軍人たちが弾薬を持ち出し処分して金に換えていたことの証拠を湮滅するため起こされた事件だ…など、諸説が流れています。結局のところ、真相は明らかにならないまま、闇に葬られてしまうのではないかという気がします。そうならないことを望みたいのはもちろんですが。(5月28日)

NPO法人チェルノブイリ救援・中部　2003年度収支報告書

(2003・4・1～2004・3・31)

収入の部		
項　目		金額(円)
救援寄付金		3,839,106
個人(648件)	3,499,289	
団体(20件)	339,817	
運営費関連寄付金		606,280
個人(99件)	606,280	
団体(0件)	0	
外務省ＯＤＡ補助金		2,862,660
地方公共団体交付金		100,000
民間助成金		7,220,560
物品売上等		159,300
預金利子等		40,267
現金過不足		-2,250
当期収入合計		14,825,923
前年度繰越		14,699,874
収入総額		29,525,797

支出の部		
項　目		金額(円)
事業費		13,572,965
医療機関支援事業費		2,605,838
医療機器メンテナンス事業	1,405,838	
医薬品提供事業	1,200,000	
保健事業費		1,350,000
粉ミルク提供事業	1,350,000	
被災者団体等支援事業		4,049,180
特別事業費		119,950
市立小児病院コンピュータ支援	119,950	
奨学金事業費		1,400,000
現地派遣事業費		1,332,046
業務委託費		508,001
駐在員費		242,600
輸送費		534,063
文通・クリスマスカード事業費		54,720
海外監査費		58,588
招聘事業費		218,998
機関紙発行費用		866,301
国内監査費		232,680
管理費		3,066,868
役員報酬		660,000
人件費		735,133
通信費		345,589
印刷製本費		49,884
旅費交通費		393,274
会議費		8,971
支払利息		0
消耗什器備品費		16,463
消耗品費		80,535
機器賃借料		0
修繕費		48,644
事務所費		586,927
支払手数料		83,880
広告宣伝費		16,837
諸謝金		8,370
団体会費		30,000
雑費		2,361
当期支払い合計		16,639,833
当期収支差額	-1,813,910	
次年度繰越収支差額		12,885,964
支出総額		29,525,797

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

2004年 4月29日　監査人 南 和也

03年度の会計を引き継いで一番気を使ったのは、とにかく誤差を出さないことでした。来てすぐの頃の現金不足を除いて、その後この目標はまずはクリアできたと思っています。これからは、わかりやすい会計処理を目指して努力をしていきます。　(会計担当：石川博仁)

事務局だより

ジトーミルから、チェルノブイリをテーマにした「児童画コンクール」の絵が届いた。心待ちにしていた子ども達の絵画、41点。サイズがばらばらで、大きなものは2つ折にされていて、その扱いの大雑把さにちょっとあきれはしたが、心弾ませそれらの絵を手にとった。本当にどの絵も力作で、全く違うモチーフの中に、一人一人の深い「チェルノブイリ」が描き出されている。すでに、これら絵の展覧会が決まった。静岡サレジオ小学校で6月8日に行なわれる。たくさんの方々がみえる学校事業があるとのこと。ジトーミルの児童画展に特別参加したサレジオの子どもたちの絵とともに、展示されることだろう。チェル救も6月12日の「総会・チェル救デー」において、これらを展示する。是非多くの方々にみていただきたい。ところでこれらの絵には「額」がない。中には自分で「額」のように白く縁取りを残して絵を書いている子もいるが、絵をより一層引き立てるためには、額がほしい。どなたか、いらなくなったシンプルな「額」をご寄付願えないだろうか？…そして、各地で展覧会を開き、多くの方々にみていただきたい。

（山盛）

私達は、イラク問題の「自己責任論」に反対します！

高遠さん達の「人質事件」に続き、フリージャーナリストの橋田さん・小川さんの尊い命が奪われました。今また、「自己責任論」が声高に叫ばれようとしています。

紛争地などでのNGO活動や取材活動には、多かれ少なかれリスクが伴います。もちろん、海外で活動する人々は、それを十分承知しています。しかし、こうした地域におけるNGOや市民団体にしかできない活動が、現地の人々の安全や人権に多大な貢献をしてきた事も、歴然とした事実です。この国際貢献は、正当に評価されるべきであり、決して「自己責任」の名において、批判されるべき問題ではありません。また、軍隊や政府に守られないフリーのジャーナリスト達の報道こそが、検閲や自主規制にとらわれることなく戦争の真実を伝え、報道の自由に大きな役割を果たしてきました。「自己責任論」は、「国益の名のもとに、人命を犠牲にすることを正当化する」大変危険な考え方です。フランスの「ル・モンド」紙が指摘したように、人道主義に駆り立てられた若者達・ジャーナリスト達は、世界に誇るべき日本人の良心なのです。（J）

編集後記

☆ EU圏の拡大で、境界線はウクライナの西端へと迫った。今やヨーロッパへの不法入国ルートとなったウクライナ、EU圏の豊かさと東側の貧しさの波にもまれるのか。（京）

☆ 負け犬（30歳以上・未婚・子なし）の私は、大の『冬ソナ』ファン。日曜の朝は目が腫れている。前夜の『冬ソナ』で大泣き。ユジンが泣くときは私も泣いてます。（佳）

☆ p3を手直し中、「現地までの地図をどうする？」と佳代に聞いたら、「空路の地図を入れるのも面白いね」と言う…「現地」と言えば、ウクライナかぁ。すっごく和んだの、ありがとね。（美）

☆ イラクのサダム・フセインが拘束されてから、まもなく半年が経つ。米国の「CIA」と組んで暗躍したフセイン。イラン・イラク戦争を長期化して「石油メジャー」をもうけさせたフセイン。ユダヤ人（ロシアのプリマコフ特使）を通じて、イスラエルと密談を繰り返したフセイン。拘留された特別室で、どんな尋問劇が繰り広げられているのだろうか？（J）

〒456−0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX （052）871−9473